

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：47303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21569

研究課題名(和文) 女子学生における摂食障害リテラシーの調査ならびに予防教育プログラムの作成

研究課題名(英文) Investigating eating disorder literacy among female university students and developing a preventive education program

研究代表者

西田 江里(Nishida, Eri)

長崎短期大学・その他部局等・講師(移行)

研究者番号：50389516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本人女子学生の摂食障害に関するリテラシーを明らかにすることで、摂食障害の早期発見や予防のための教育プログラムの作成を目的とした。

日本人女子大学生および短期大学生計1424人を対象に、ビネット法による摂食障害に関するリテラシー調査用紙を実施し、851の回答を得た。その結果、摂食障害という疾患名は理解できるが、摂食障害が精神疾患であることや治療が必要な疾患であることはあまり認識されておらず、摂食障害に関するリテラシーは十分でないことが示された。よって、摂食障害予防のためのプログラムにおいては、まずは摂食障害に関する正しい認識をもつことが必要だと考えらえる。

研究成果の概要(英文)： This study's goal was to assess the level of eating disorder literacy among Japanese female university students, and to create an educational program for early detection and prevention based on the findings.

We administered an eating disorder literacy questionnaire that applied the vignette technique to Japanese women attending four- or two-year university programs. The response rate was 59.8% (851/1424). Students were found to be fairly illiterate about eating disorders. While most were familiar with the diseases by name, few recognized them as psychological disorders that require treatment. This informs us that preventive programs must first and foremost ensure that participants are given the right information about eating disorders.

研究分野：食育・食生活・食行動

キーワード：摂食障害 若年女性 メンタルヘルスリテラシー

1. 研究開始当初の背景

(1) 摂食障害は女子中・高・大学生の約 20% が有しており (中井, 2002)、慢性で難治性の医療抵抗性の強い疾患である (石川, 2014)。2013 年に公表された DSM-5 においては、これまでであった Anorexia Nervosa (AN) や Bulimia Nervosa (BN) に加え、Binge-Eating Disorder (BED) が追加されたことにより、これまで以上に摂食障害に取り組むことが必要となった。しかし、早くから治療専門施設が整備されている欧米とは異なり、本邦においては摂食障害の専門医療研究施設がなく、診療環境の整備が不十分であることが指摘されている (石川, 2014)。よって、摂食障害の治療が難しい現状においては発症を防ぐための活動が重要であるが、摂食障害予防のための調査・研究は少ない (生野, 2010)。

研究者らは、これまで地域女性の健康や食生活改善に関する研究を行い (西田ら, 2013b、西田ら, 2012b)、女子大学生の約 40% が摂食障害傾向である食行動異常を有し (西田ら, 2012a)、日常のストレスによって悪化することを報告した (西田ら, 2013a)。今後、摂食障害の予防や患者の減少のためには摂食障害好発年齢である女子学生を中心とした予防活動が必要であると考え、疾病の予防や早期発見のためには、疾病の認識や対応能力が必要となるが、その調査方法としてヘルスリテラシーに関する調査がある (Morris, et al, 2013)。摂食障害に関しては、摂食障害の症例を提示し (ピネット法)、その回答内容から摂食障害に関するリテラシーを明確にしている文献が多く (Gratwick-Sarll, et al, 2013)、摂食障害に関するリテラシーは、摂食障害の予防や改善に役立つことが報告されている (Hay, et al, 2007)。よって、摂食障害に関するリテラシーの調査研究は重要だが、本邦では摂食障害のリテラシーに関する調査研究はほとんど行われていない。

2. 研究の目的

本研究では、「摂食障害に関する正しい情報の獲得とそれを活用することによる摂食障害の予防や患者に対する適切な対応ができる能力」を「摂食障害リテラシー」と定義し、女子学生に対する摂食障害や食行動異常の予防 (一次予防)、摂食障害傾向者や患者の早期発見および改善 (二次予防) を目的とした、摂食障害リテラシーの調査を実施し、摂食障害好発年齢である日本人女子学生の摂食障害にリテラシーを明らかとする。

さらに、調査結果より明らかとなった摂食障害リテラシーの状況をもとに摂食障害の予防を目的とした教育プログラムを作成する。

3. 研究の方法

摂食障害リテラシー調査票を用い、本邦における摂食障害リテラシーを明らかにするため、調査を実施した。本研究で用いたピネットは Mond らが作成した AN、BN、BED のピネット (Mond, et al., 2004, Mond, et al., 2006, Mond & Hay, 2008) をもとに日本語版を著者に許可を得たうえでバックトランスレーションを行って作成した。質問項目および質問に対する選択肢は Mond らの調査結果 (Mond, et al., 2004, Mond, et al., 2006, Mond & Hay, 2008, Mond & Arrighi., 2011) 及び摂食障害治療ガイドライン (日本摂食障害学会, 2012) を参考に、日本人女子大学生に対する予備調査を経て作成した。

調査対象者は、地方私立大学に所属する日本人女子大学生 (以下大学生) および地方私立短期大学に所属する日本人女子短期大学生 (以下短大生) とし、それぞれ学校の倫理審査委員会の審議を得て実施した。

調査の実施では AN、BN、BED の各ピネットとそれに対する質問ならびに選択肢、摂食障害スクリーニング調査である Eating Attitude Test (EAT-26) (Garner, et al, 1979)、Eating Disorder Examination Questionnaire (EDE-Q) (Fairburn, 1994)、SCOFF (Noma, et, al, 2006) がまとまった冊子を対象者に配布し、回答された冊子は 1 か月以内に専用の回収箱を用いて回収した。回収した調査結果は集計・統計処理を行い、データ解析には IBM SPSS Statistics 23 For Windows (IBM, Japan) を用いた。

4. 研究成果

(1) 対象者の属性

本研究の調査対象者は大学生 1101 人および短大生 323 人であった。回収された調査票は計 851 (大学生 610、短大生 241) であった。

大学生の平均年齢は 20.6 ± 1.78 歳 (18-29) であった。Body mass Index (BMI) の算出が可能だった対象者は 585 名で、平均が 20.8 ± 2.91 (15.2-37.9) であった。BMI18.5 未満が 111 名 (19.0%)、25 以上が 44 名 (7.5%) であった。短大生の平均年齢は 19.3 ± 0.91 歳 (18-24) であった。Body mass Index (BMI) の算出が可能だった対象者は 225 名で、平均が 21.0 ± 2.85 (15.2-34.5) であった。BMI18.5 未満の者が 41 名 (18.2%)、25 以上が 17 名 (7.6%) であった。

(2) 主な問題

ピネットの人物が抱える主な問題点として、大学生は AN や BN では「摂食障害」(AN34.7%、BN51.2%) と正しく理解したものが最も多く見られた。しかし、BED においては「摂食障害」だと認識した者は 13.9% しか確認されなかった。短大生においても同様に AN や BN では「摂食障害」

(AN40.0%、BN43.9%)と正しく理解したものが最も多く見られたが、BEDは12.2%しか認識されておらず、BEDはANやBNに比して摂食障害と認識されていないことが示された。

(3) 原因

ピネットの原因においては、大学生、短期大学生ともに同様の回答傾向がみられ、ANでは「体形についての考え方」という意見が最も多く(大学生40.7%、短大生37.8%)、BNでは「極端なダイエット」(大学生27.0%、短大生)という意見が多く見られた。BEDでは「本人の性格」(大学生38.2%、短大生33.9%)や「日常のストレス」(大学生36.7%、短大生34.3%)が多く回答されていた。

(4) 対応

ピネットの人物の最も助けになる人においても大学生、短大生の回答傾向は類似しており、ANでは「精神科医、心療内科医」(大学生23.7%、短大生19.4%)や「母親」(大学生22.7%、短大生27.8%)が多く選択されていた。BNにおいてもANと同様に「精神科医、心療内科医」(大学生19.4%、短大生23.0%)や「母親」(大学生25.7%、短大生28.3%)が多く選択されていた。BEDでは「管理栄養士(栄養士)」が最も多く(大学生32.7%、短大生21.8%)、次いで「友人」(大学生21.4%、短大生20.4%)が回答されていた。

対処方法ではAN、BNでは大学生と短大生で一部回答傾向が異なり、大学生ではANでは「認知行動療法」が最も多く選択され(29.5%)、次いで「カウンセリングを受ける」(16.0%)が多く選択されていた。BNでは「食事や栄養についてのアドバイスをもらう」(20.9%)や「カウンセリングを受ける」(19.5%)が多く見られた。短大生ではANとBNで共通して「カウンセリングを受ける」が最も多く選択され(AN25.7%、BN23.9%)、次いで「病院で治療を受ける」(AN22.2%、BN22.2%)が多く選択されていた。BEDでは大学生と短大生の回答傾向が類似しており、「食事や栄養についてのアドバイスをもらう」が多く(大学生28.5%、短大生21.3%)、次いで「体重を減らすためのアドバイスをもらう」が多かった(大学生14.7%、短大生16.5%)。

(5) 症状に対する認識

大学生、短大生ともにAN、BN、BED3つのピネット間で認識の差があったものは、「苦しんでいると思うか」、「治療を受けることが重要であると思うか」、「深刻な問題であると思うか」であった。

「苦しんでいると思うか」に関してはBEDでは「非常に思う」(大学生AN34.2%、BN30.6%、BED17.9%、短大生AN40.4%、

BN33.0%、BED21.7%)と回答した者が少なく、ANとBED間($p<0.001$)およびBNとBED間($p<0.001$)では有意な差が見られた。「治療を受けることが重要であると思うか」では「非常に思う」と回答した者が多かったが(大学生AN39.9%、BN31.7%、BED20.4%、短大生AN42.2%、BN37.4%、BED26.5%)、AN、BN、BEDの順に「非常に思う」と回答した者の割合は少なくなっていた。「深刻な問題であると思うか」においてもBEDでは「非常に思う」と回答した者の割合がANやBNより低かった(大学生AN51.6%、BN39.7%、BED22.0%、短大生AN52.6%、BN41.7%、BED23.0%)。

(6) 理解と認識

調査結果より、ANやBNに関しては摂食障害としての認識がみられたが、BEDに関しては摂食障害としての認識が低い傾向がみられた。しかし、ANやBNの対処方法としては治療が必要な疾患としての認識が十分でない可能性も考えられた。また、ピネットの症状に対する認識としてはANやBNでは本人にとって苦しく、治療が必要な深刻な状態であるとの認識が強かったが、BEDではANやBNよりも軽微なものだと認識されている可能性が示された。

これらの結果は今後の摂食障害予防のための教育プログラムを作成するうえで必要な対象者の基礎データであり、今後の研究活動に活用していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

1) 西田 江里, 中根 秀之, 田中 悟郎: ピネット法を用いた女子短期大学生における摂食障害に関するメンタルヘルスリテラシー調査, 研究紀要(長崎短期大学), 30,15-22, 2018

〔学会発表〕(計 4件)

1) 西田 江里, 岡本 美紀, 中根 秀之, 田中 悟郎: 摂食障害傾向の有無と摂食障害に関するリテラシーとの関連について, 第21回日本摂食障害学会総会・学術集会(広島), 平成29年10月

2) 西田 江里, 岡本 美紀: 管理栄養士養成課程在学中の女子大学生における摂食障害に関するリテラシーについて, 第64回日本栄養改善学会学術総会(徳島), 平成29年9月

3) 西田 江里, 岡本 美紀: ピネット法を用いた女子大学生の摂食障害に関するリテラシー調査, 第63回日本栄養改善学会学術総会(青森), 平成28年9月

4) 西田 江里, 岡本 美紀, 馬場 智子, 外尾 亜利珠, 中根 秀之, 田中 悟郎:ピネット法を用いた女子大学生の摂食障害に関するリテラシー調査, 第 20 回日本摂食障害学会総会・学術集会(東京), 平成 28 年 9 月

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 江里 (NISHIDA Eri)
長崎短期大学 食物科 講師
研究者番号: 50389516